



竹千代賞

# 見えないもの

秋山結美

放課後、忘れ物を取りに行くとき空き教室から声が聞こえた。とても楽しそうな笑い声。引き寄せられるように教室に近づくと、こっそり聞き耳をたてた。

「マジで面白いよなあ。」

「次、俺やる番な〜。」

「あっ、俺もやりてえんだけど！」

思えば、あまり友達と歓談したり玩具で遊んだりしたことがなかった。そんな余裕はなかった。

声は聞こえた。

一 臯久の見えたもの

九月。入院していた『月代二夜』が今日、復帰するらしい。彼女は小学校の頃から一度も学校に来たことがない。その為この小さな町で彼女を見たことがある人は誰もいない。先生でさえ一度も会っていないという。教室がざわついている中、玖力臯久は独り、教室の隅にある自分の机でうつつけていた。窓の外には曇天が広がっている。

ホームルームの時間になり、先生が教室に入って来た。しかしそこにいたのは担任の赤垣先生、そして教室の中を窺うように校長先生が廊下に立っていた。自然と生徒は席に着いたが、話し声は鎮まることなく、根拠のない憶測を巡らせて楽しんでた。

赤垣先生がやっとの思いでそれを静めると、本題に入った。しかし先生の様子に臯久は違和感を覚えた。

「えー、皆知っているかもしれないが、月代二夜さんが退院しました。えー……少し遅いですがクラスの一員として、えー仲良くしてくださいね。」

赤垣先生は緊張すると「えー」と入れる癖がある。クラスの全員がそれを知っているので所々からクスクスと笑い声が上がった。

「入ってきていいぞ。」

生徒の視線が集まる中、彼女は静かに教室に入って来た。

お団子にした黒髪を、露草色の髪紐で留めている。華奢な体は今にも倒れてしまいそうで、肌は陶器のように白かった。そして左足と左手に包帯を巻いている。

いかにも『か弱く病弱な大人しい女の子』を連想させる、そんな容姿だった。

彼女は教卓の前まで行くことまっすぐこちらを見た。

「月代二夜です。短い間ですが宜しく願います。」

よく通る、澄んだ声だった。その声に戸惑いの色はなく、むしろ堂々としていた。

淡々と自己紹介を終らせると、にこりともせず軽くお辞儀をした。



「見ての通り月代はまだ怪我が完治していない。くれぐれも怪我を悪化させるようなことはさせないように。あんま過激な運動には誘うなよー。じゃあ月代はその席ついて。なんかあったら学級委員の楓桔ふうきにでも聞いてくれ。」

楓桔は二夜に手を振るとにこやかに笑った。

「それじゃあ授業始めるぞー。」

赤垣先生は大雑把な注意事項だけ言うとう授業の準備を始めた。

机の間を通り先生に指定された後ろの方の席に着くと、二夜は観察するように教室を見回した。臯久は一瞬目が合った。しかし二夜は一度頷いてから他の生徒と同じように授業を受ける準備を始めた。

臯久はそれに嫌な感覚を覚えた。無視されているのかと不安になった。

そんなことを考えながらボーっと教室を眺めると、いつの間にか校長先生がいなくなっていることに気が付いた。結局、何をしに來ていたのかと臯久は首を傾げた。

昼休み。二夜の周りには人が群がっていた。質問の波に困っている様子はなかったが、クラスの人たちにあまり関心がない様子だった。その証拠に先生に呼ばれると話が中断するのに惜しむ様子もなくさっさと教室を出て行ってしまった。

二夜はそんな感じで初日を終えた。その後も、誰かと何時もいるわけではないがクラスで孤立するわけでもなく。特別仲の良い友達も作らずクラスの輪の中の何処かで静かに話を聞いていた。

「あ。おはよう玖力君。」

まだ誰も登校していない時間。臯久はいつもの様に学校に着くと、教室には既に二夜がいた。教室にある花に水をやっていたのか、手には小型のじょうろが握られていた。

「僕の名前なんて、もう覚えてるんだね。」

「もう全員覚えてるよ。」

二夜はまだ退院して四日目。このクラスには三十人程いる。それをもう全員の名前を覚えたならばすごい記憶力だ。

「あと。」

急に二夜の声色が変わり皐久は体を強張らせた。何か気に障るようなことでも言ってしまったのだろうか。

「玖力君、自分のこと尊敬してる？」

「えっ？」

「しないでしょ。」

突然の質問に戸惑いを隠せなかった。

「尊敬……？」

「そう、尊敬。」

「……僕は、尊敬されるような人じゃないよ。」

やっとの思いで答えた言葉に皐久は自己嫌悪を覚えた。しかしそれを聞くと二夜は溜息を吐いた。

「それは事実じゃなくて君の解釈。君が勝手に思っているだけ。自分のこと……もっと大切にしなよ。」

それだけ言うと二夜は教室を出て行った。

教室に残された皐久は呆然と座っていた。

そんな事を言われるのは初めてで、少し目元が熱くなった。

二夜が教室に戻って来ると、なんだか恥ずかしくなっていて皐久は教科書を開いた。不自然にならないように、そのまま勉強を始めた。

「そこ、答え違うよ。」



「えっ。」

顔を上げると二夜が皐久のノートを覗き込んでいた。思わず体をのけ反ると二夜は顔を顰めた。それを見て皐久は青褪めた。

「ごめんっ。」

「え？ 何が？」

キョトンとした顔で皐久を見つめた。その反応に皐久も啞然とした。

「いや、なんか…えっと…。」

少し考えてから、二夜はそれを察したのか、クスクスと笑い出した。

「別に謝らなくてもいいのに。驚いただけでしょ？」

その対応に呆然としてみると、また二夜は笑い出した。

「何にびっくりしたのかは知らないけど、早くここの問題直したら？ 勉強、大丈夫？」

「…えっ。あ、そうだね。」

「それは、√の中の数字が小さくできるから…。」

「またもや皐久は呆然としながら二夜を見た。勉強を手伝ってくれることにも驚きだがそれ以前に、些細なことだったが自分の事を心配してくれていることに何よりも驚いた。」

「玖力君？」

「あ、何でも、ないよ。」

皐久はゆっくり、二夜のヒントを頼りに問題を解き直していった。

「こう？」

「そう、正解。なんだ。できるじゃん！」

そして次の日から朝、二夜は皐久に勉強を教えてくれるようになった。二夜は教えるのが上手く、授業中も

聞けば教えてくれる。今まで追いつけなかった授業も少しずつ分かるようになった。

こんな事をしてくれる人は初めてだった。

臯久は初めて『友達』ができた気がした。

二

「アハハ！」

唐突な笑い声に二夜は歩調を速めた。

病院で検査を受け、まだ完治してないと分かつてはいるが、二夜は怪我のことなど気にせず廊下を走った。今は二時間目。確か国語の書写の授業だったはず。国語の屋嘉部やかべ先生は厳しい先生だ。あんな笑いが起こるはずがない。

少しきこちない足取りで教室の扉を開けた。

一瞬笑い声が止んだが、入って来たのが二夜だとわかるとまた「わらい」が広まった。教室を見回すと先生の姿は無かった。

しかし二夜はそれを見た瞬間、目の前が真っ赤になった。覚悟はしていたがそれでもどうしようもなく黒い感情が沸き上がる。

「何で笑ってるの。」

二夜が来て臯久は少し安心した。

「つき——」

「何で笑ってるの。」



臯久が全身に少し黒くなった水を浴びていた。床にはバケツが転がっている。

声色は大して変わらないが、普段には無い威圧感には殺気すら感じた。

二夜は急いで臯久のもとへ駆け寄るとハンカチで顔を優しく拭いた。

「大丈夫？」

「あ……うん。ありがとう。」

「何があったの？」

その質問に動揺したのか臯久は顔をそらし、そのまま下を向いた。それを見て回りの人が咄嗟に口を開いた。

「玖力君ね、バケツを——」

「別に君に聞いてない。」

他の人の話を聞く気はないようだった。臯久はいつもとは違う二夜に驚いて一瞬、顔を盗み見た。

失笑していた。

「どうしたらバケツの水が全身にかかるのか、説明してくれる？」

抑揚のない声で言った。

「バケツは一つしかない。全身に、頭まで浴びるなら玖力君は屈んでないといけない。まあ……うっかりならだ

けど。仮にそうだとして何で何もないところで屈んでたのって話になる。それ以前に何で用もないのにバケツ

のある教卓の前まで来ていた？」

「それはっ」

「嘘つくならバレない様につきなよ。」

間髪入れずに二夜が言い捨てた。静まり返った教室で口を開く人はもはやおらず、沈黙が続いた。

「んー？ 何かあったの？」

手をハンカチで拭いながら楓桔が後ろのドアから入って来た。すると空気が一変した。

「月代さんは考えすぎだつてー。」

教室に笑い声が広まった。

「ていうか、学級委員はどこ行ってたんだよー。」

「んー？ そのトイレ行ってた。ていうか先生まだ帰ってきてないのかよ。」

他愛のない会話をしながら皆、自然と席に戻った。しかし臯久に声をかける者は誰もいなかった。

「玖力君。保健室行こう。」

二夜は腕を掴み呆然としている臯久を半ば引きずる形で教室を出た。

教室も保健室も一階のため着くまでに時間はかからなかった。

「先生。」

保健室の先生は臯久より先に二夜を見て一瞬驚いたような顔をした。しかしすぐに笑顔で声をかけてきた。

「どうしたの？ びしょ濡れじゃない。」

「着替えありますか？」

二夜が先生と話しているとき、臯久はふと自分の腕を見た。少し赤くなっていた。

「やっぱり、怒ってた…。」

「どうしたの？」

「あつ、ううん。何でもないよ。」

「これ、着替えて。」

そう言って白いワイシャツを渡してきた。

「そこで着替えて。私、お手洗いに行ってくるね。」

二夜が保健室を出てくと臯久は言われた更衣室に向かった。

「先生、絆創膏下さい。」





「はい、ちょっとま…待っててね。」

その先生の反応に既視感を覚え、振り返ると男の子がいた。一年生だろうか。臯久はどことなく二夜に似ている雰囲気を感じた。視線に気が付いたのか目が合った。しかしすぐに目を逸らされた。臯久は自分が凝視していたことに気づき、恥ずかしくなって更衣室に入った。

「まだですかー？」

「えっ。早いね。」

三分もたたないうちに二夜は帰って来た。

「手洗ってたただけだから。」

それにしても早い気がするが待たせない様にと臯久は急いで袖を通した。服は少し大きかったがほんのり暖かかった。

「ねえ。」

「…ん、あれ？ どうしたの？」

教室で二夜は読書中の楓桔にこっそり声をかけていた。

「そのトイレってどこにある？」

三

「どこから？ が出てきたの…。」

「……。」

あれ以来、二夜は何かと臯久を心配するようになり、大半の行動を共にしていた。あの事件について先生か

らは何も無く、沈黙を続けている。

そして来週のテストに備えて二夜の家で勉強を教えられていた。

「姉さん、お茶できたよ。」

入って来たのは、保健室で見かけた男の子だった。

「あ…。」

「紅茶でいい？ 姉さん。」

「うん。ありがとう。溢さないで二階まで来られた？」

「それくらい出来るし。」

目の前に出された紅茶からは、甘い、いい香りがした。

「えっと…。」

「ああ、紫雨、挨拶して。」

紫雨と呼ばれた男の子は深々と頭を下げた。

「月代紫雨です。宜しくお願いします。」

「お、お願いします。」

紫雨はチラッと臯久を見ると不思議そうに二夜に尋ねた。

「それで姉さん、この人が…？」

「あ、うん。そうだよ。玖力臯久君。」

紫雨は臯久のことを知っているようだった。

「ねえ、紫雨もやる？」

二夜は、部屋を出ようとしていた紫雨を呼び止めると、おいでと手招きをした。

紫雨は間をおいてから二人のところへゆっくり来ると二夜の横に座った。



「何解してるの？」

そう言って皐久のノートを覗き込むと笑い出した。

「ここ、答え違う。」

「ええ…。」

皐久はまさか年下にも言われるとは思っておらず、恥ずかしくなった。

「姉弟揃って頭良いんだね。」

「いいから、どんどんやる。」

「皐久？は頭悪いのな。」

「こら、紫雨。」

すると下でインターホンの鳴る音がした。

「ごめん、出るね。問題進めときなよ。」

それだけ言うと、二夜は部屋を出て行った。そして部屋には皐久と紫雨だけになった。

沈黙が続く。

「姉弟じゃない。」

「えっ…？」

突然の告白に一瞬思考が止まった。それを見て紫雨は露骨に嫌そうな顔をして小さく溜息をした。

「珍しい事じゃないでしょ、今時。」

「そう、だけど…。」

詳しくは知らないが今の日本では少子化と捨て子問題、育児放棄にストリートチルドレン。今では養子だという人も数多くいる。

「何々？ どうしたの？」

「うわあっ！」

いつの間に戻ったのか二夜が後ろから二人の間に割って入ってきた。

「姉さん…いつから…。」

「あれ、紫雨でも分かんなかった？ そんなに存在感無いのかなあ。かなしー。」

あははと笑う二夜を横に臯久は気まずそうに目を逸らした。

「何でもないよ。」

「…まあいいんだけどね。それで？ 勉強の方は進んだかい？」

「えっ。」

ノートに目を移す。当然だが目の前にあるのは代わり映えのないノートだけ。

「せつない…。」

「切ないって…あ、一問もやってないじゃん。分かんなかった？ それとも紫雨が邪魔した？」

すると紫雨は、仏頂面でそっぽを向いた。

「男の話。」

「何それ？」

「と、とにかくやろう。」

勉強をしに来たこと忘れかけていた臯久は二人を急かし、問題に取り掛かった。

しかし…

「…ねえ、√ってなんでこんな書き方にしたんだろうね。ぐねぐねで書きにくい。」

ノートにはもはや原形をとどめていない、√のようなものが書かれていた。

「何でなのか知ってる？」

「……。」



その後も皐久の珍問に二夜が丁寧に答えるせいで脱線が続いた。日が暮れてもほとんど変化のないそれに三人共閉口した。

#### 四

二〇六五年、この頃から日本は国内状況が悪化していた。一つは少子化問題。全国にいる十五歳未満人口は一千万人を切った。その中で虐めによる自殺者が年間千人を超えた。その他にも捨て子問題、そこからストリートチルドレンも生じ子供犯罪件数も一気に上がった。

「…だそうですね。」

そう言って皐久は紫雨の方を見た。

「知らなかったの？ だから最近西にある小学校が閉校したんだよ。」

「あんまり詳しくは…。」

皐久はあの後紫雨の言った事が気になって、二夜がない時を見計らって紫雨にその事を聞きに来ていた。「まあ、この辺の地域は田舎だからあんまり見ないだろうけど、都市部なんか裏路地入れればストリートチルドレンなんていくらでもいるよ。」

「そうなんだ…。」

「それを解消するために作ったのが『児童保護政策』。まあ、どんな内容か国民に知らされてないから批判も多いんだけど、そのおかげで少しづつ良くなってるわけ。」

「そこまで言うと紫雨は溜息を吐いた。」

「その好奇心を別の事に注ぎなよ。」

「国のことを知ろうとしてるからこれも勉強に入——」

「らないよ。」

ばっさりと言われ、皐久は苦笑いを浮かべた。

「それに皐久が知りたいのはぼくたちのことですよ。」

「……。」

その言葉に皐久は閉口した。

聞いてはいけないかとも思った。姉弟ではないということとは片方、あるいは両方が養子ということだ。しかし今さらになって、もし相当深刻な事情でそうならと皐久は怖くなった。興味本位で聞いている自分は部外者で、野次馬と同じだと後になって気付いた。

気まずそうに視線を落とす皐久を見て、紫雨は更に言い寄った。

「皐久は知りたいんですよ。ぼくたちの過去の事、というか姉さんの事。」

「そう……だけど…………。」

沈黙が続いた。

「ま、ぼくも知らないけど。」

「えっ!？」

紫雨はいたずらっぽく笑った。

「じゃあさ、同盟組もうよ。どーめー。」

「ど、同盟?」

「そ。月代二夜過去暴露同盟。」

「つき……?」

「月代二夜、過去、暴露、同盟。」

「ああ……そのまま。」



紫雨は少し考えると、頷いた。

「でも名前長いから暴露同盟にしよう。」

「なんか悪そうな名前だね。」

「別にいいでしょ。姉さんからすればいいもんじゃないんだし。」

「でも、いいのかな。そんな…。」

紫雨はわざとらしく溜息を吐いた。

「ぼくが聞いても教えてくれないし。臯久が聞いてもどうせ同じだし。姉さんの過去はぼくも知りたいし。臯久も知りたいでしょ？ だから。」

そう言って紫雨は手を差し出した。臯久が迷いながらもその手を取ると紫雨はにかっと笑った。

「それじゃあ、改めてよろしく。」

この日から、紫雨と臯久は仲良くなっていった。

「ただいま。」

答える声はない。

臯久は靴を脱ぎ、リビングの扉を静かに開け、中を窺った。

母と父が机でうなだれているのが見えた。臯久はリビングには入らず、そのまま階段を上った。  
「稜久。」

臯久は部屋の前で弟の名前を呼んだ。

臯久が紫雨と暴露同盟を結んだ次の日、臯久は学校を休んだ。

「姉さん。臯久今日いないの？」

「紫雨、何でいるの？」

紫雨が二夜のクラスまで来ていた。要件は臯久の事らしい。

「何で分かったの？」

紫雨はニヤッとすると得意げに話した。

「臯久ね、いつも登校時間七時二十分くらいなのに三十分に教室こっそりのぞいたら姉さんしかいなかったから。」

二夜は目を見開いた。

「三十分に教室来てたの？ 気付かなかった。」

「本当？ やったっ！」

紫雨は顔をほころばせた。

「何してんのー？」

突然楓桔が声をかけてきた。

「何、お前。」

紫雨は楓桔を警戒しているのか二夜の後ろに隠れた。それを見て楓桔は、ははと笑った。

「何もしないよー。月代さんの弟さん？」

「…そだよ。」

「へえー。月代さん、弟いたんだ。」

紫雨は二夜の様子に違和感を覚えた。

「姉さ——」





「そういえば楓桔君、玖力君が休んでる理由知らない？」

二夜は紫雨の言葉を遮った。紫雨は顔を曇め一言言おうとしたが楓桔を見て口を閉じた。

「えっ、玖力？ 知らない…あ、風邪で休むって先生が言ってたよ。お見舞い行くの？」

あからさまな動揺に紫雨は二夜の後ろで小さく笑った。

「楓桔君は？ 行くの？ 俺は行くつもりだけど。」

すかさず紫雨が楓桔に突っかった。

「お前、臯久と仲いいの？ 臯久からも姉さんからもお前の事聞いたことないけど。」

「それは…ほら、俺学級委員だし。」

「ふーん。」

あまりにも楓桔が分かりやすく、紫雨は鼻で笑った。

「あ、月代さんも行くなら放課後いっしょに行かない？」

「うん、いいよ。」

二夜はいつも通りだった。

「じゃあ放課後。」

それだけ言うと逃げるようにどこかへ行ってしまった。

「姉さん、あいつ何？」

「今回の重要人物。」

「まあ見ればわかるけど。」

二人は楓桔に冷淡な目を向けていた。

「月代さん。えっと…。」

「ぼくが来たら問題あった？」

紫雨も来るとは思っていなかったのか、楓桔は顔を引きつらせていた。

「ごめんね。紫雨も一緒でいい？」

「断っても勝手についてくから。」

「大丈夫、だよ。」

紫雨は楓桔に対して警戒心をむき出しにして二夜にくっついた。

「それじゃあ行こうか。」

三人は皐久の家へ向かった。

皐久の家は学校から徒歩二十分程の住宅街の一角にあった。

「ここだね。」

三人は玖力と書かれた表札の前に立ち止まった。楓桔はインターホンを鳴らしたが、中からは誰も出てこなかった。

「家に人いないのかな。」

「でも玄関あいてるよ。」

紫雨は勝手に敷地に入り扉を開けていた。

「紫雨、人いそう？」

紫雨は顔を家の中に少し入れてじっと聞くと、首を横に振った。

「よし、じゃあ入っちゃおう。」

「えっ?! 月代さん、勝手に入っているの？」

「大丈夫だよ。」

「姉さん、早くー。」



「ええ…。」

さっさと二夜が家に入ると、楓桔はその後を追った。

家の中はどこもカーテンがしてあった。電気も消してあり、人がいる様子はなかった。

「誰もいないね。窓も閉めてあるし。」

「臯久一、いるー？」

「こんな音立てて入って来ているんだからいたら出てくるでしょ。」

紫雨は不思議そうな顔をした。

「じゃあいないって事？」

「それはもう少し探さないとわからない。ね、楓桔君。」

「えっ、そ、そうだね。」

三人は数分一階を見て回ったが特に何もなかったため、二階に上がる事にした。

薄暗い階段を上り二階を窺うと扉が四つあった。そのうちの二つの扉には木製のプレートが掛けられてあった。

「臯久と…稜久？」

「誰それ。」

「弟さんじゃない？」

先に臯久の部屋を開けた。

「臯久一。」

「いないね。」

「本当に家にいないのかな？」

二夜が考え込むと、楓桔はもう一つの部屋を指した。

「そっちの部屋も入っておけば？ 一応、さ。」

「いないでしょ。何で自分の部屋じゃないのにいるんだよ。」

「一応だよ、一応。」

楓桔はよっぽど紫雨が苦手なのか、紫雨の方が年は下のはずだが、やけに縮こまっていた。

「じゃあ一応見しておくか。」

二夜は稜久と書かれたプレート部屋の扉を開けた。

「暗いね。」

「俺カーテン開けるね。」

そうやって楓桔が部屋の中へ入っていった。

同じように二夜と紫雨も入ると紫雨は静かに部屋の鍵をかけた。

それと同時に楓桔がカーテンを開けた。部屋の中に光が差し込んだ。

「…それで楓桔君。君は何がしたかったのかな？」

そこには皐久と稜久がいた。

猿轡をされ、手足を縛られている。

「皐久。やっぱいた。」

「紫雨、玄関の時から気付いてたくせに。」

紫雨は含み笑いをした。

二夜は皐久と稜久の猿轡を取ると、微笑んだ。

「月代さん…。」

「姉さん、これで解決じゃない？」



「そうだね。予定より早かった。」

「どういう事…。」

楓桔が愕然としてみると、二夜は深くお辞儀をした。同じように紫雨も頭を下げた。

「それでは改めて。初めまして、玖力皐久様、玖力稜久様、水波楓桔様。」

皐久と楓桔は二夜のおまりの変容ぶりに固まった。

「私は児童保護政策本部から参りました、月代第一部隊大隊長月代二夜です。」

「同じく月代第一部隊中隊長月代紫雨。」

「児童保護政策…。」

二夜は淡々と話を続けた。

「今回玖力稜久様より玖力皐久様の虐めについての調査を依頼されたためこちらに参りました。」

「稜久が…?」

皐久は稜久の方を見た。稜久は小さく頷いた。

「お兄ちゃん、運動するのとかあんまり好きじゃないのに、怪我して帰ってくるから…。」

楓桔は顔色を失った。

「何で…。」

「今回調査の結果、加害者は水波楓桔、傍観者二十八名となりました。」

「そこまで言う和二夜は元に戻った。」

「何か言いたいことはあるかな?」

「いつから分かってたの?」

皐久は聞いた。

「楓桔君が加害者だって確信したのは国語の授業での件だね。その前から何人かに絞ってた中にいたけど。」

「でも、あの時俺はいなかった。だから…。」

すかさず楓桔は否定した。

「そうだね。だからその時は楓桔君だと確定してなかった。楓桔君、その時近くのトイレに行ってたんだよね。」

『んー？ そのトイレ行ってた。』

「だからその後、トイレ行ったの。そしたら工事中だったんだよね。下水道がどうたらって。入れないはずなんだよ。なのにトイレ行ったって、おかしくない？」

「あ…。」

楓桔は首を振った。

「一応楓桔君の指す“そのトイレ”が工事していたトイレか確認するために楓桔君に案内してもらったらそうだったしね。ちょっと日本語おかしくなっていたから怪しまれるかなって思ったんだけど。」

「だからトイレの場所聞いてきた…のか。」

二夜は頷いた。

「他にはある？」

そこまで言うと、またさっきの口調になった。

「ないなら楓桔様、貴方を一度こちらで拘束させていただきます。」

すると、楓桔の様子が一変した。

「それで臯久を救ったヒーローのつもりか？」

二夜には楓桔が怯えているように見えた。

「どうし——」

「お前には救えないっ!!」

「…何が。」



「月代さん…。」

「ごめんね。二人ともちょっとそこにいて。」

二夜は持ってきていたバックから睡眠薬を取り出すと楓桔に打ち、横に寝かせた。

「姉さん、下水流来るって。」

「えっ。第何？」

紫雨は気まずそうに言った。

「第一部隊。」

すると下で玄関を開ける音がした。

「夜ー。いるかいー？」

「早っ。」

紫雨はまた二夜の後ろに隠れた。

「綴さん、上です。」

二夜が大声で叫ぶと階段を上る音がした。そして紫雨が閉めたはずの扉の鍵が勝手に開いた。

「やあ。夜、紫雨。」

そう言って入って来たのは皐久と同じくらいの年頃の女の子と紫雨と同じくらいの男の子だった。

「お久しぶりです。綴さん。」

二夜が女の子に言った。

「鍵閉めたのに。」

紫雨がうめくと男の子が鼻で笑った。

「紫雨、ピッキング位できないの？」

「ハア？」





「こらこら二人とも。琥珀、挑発しない。」

綴は睨みあう二人をなだめると、二夜の方に駆け寄った。

「大丈夫だったかい？」

「はい、特には。」

皐久はそのやり取りを呆然と見ていた。そのうち、救急車が来ると楓桔は病院に搬送された。

後日、二夜達が報告のためにもう一度皐久の家に来た。

「こんにちは。玖力君。」

「…後ろの方は…？」

二夜の後ろには紫雨以外にあの時に来た二人がいた。

「やあやあ、先日はどうも。」

稜久も入れて六人で報告会を始めることになった。

「母さん達は一緒じゃなくていいの？」

この場には子供しかいない。そもそもこの騒ぎすらほとんど知らされて無い様だった。

「この政策の内容が秘密にされている理由がわかるかい？」

綴が皐久に聞いた。

「えっと…。」

「分かんないの？」

琥珀が鼻で笑った。同じように紫雨も笑った。

「もし知ってたら琥珀の責任な。」

「あ？」

また紫雨と琥珀が睨みあっていた。今回は綴も二夜も二人を放って話に入った。

「君は二夜からその政策の人間だって聞いておかしいと思うことはなかったかい。」

皐久は少し考えてから目を開いた。

「そうだって、何で子供なのに…。」

「そこなんだよ。」

そこまで聞いていたのか紫雨が顔を顰めた。

「綴さん、それ言っちゃっていいの？ 皐久は一般人だよ？」

綴はあははと笑った。

「大丈夫だよ。大人より子供の方がよっぽど信用できる。」

「綴さん…。」

なぜか気まずい空気が流れていた。

「それでは話そうか。この政策の事を。」

綴はすべてを話した。政策の為に働いてる子供が約一万人いること。その殆どが捨て子、ストリートチルドレンなど戸籍が無い子どもである事。任務中に死亡した場合、その子供はいなかったことにされること。任務は八つの等級があり数が大きい程難しい事。等級ごと担当する人が違う事。

「子供のことは子供が一番知ってるからね。」

「…そんな事を国がしてるの？」

「だから隠してるんだ。ちなみに今回の君の任務は三級だったんだが、僕がやっていた任務とも繋がっていたから、最悪七級だったかもしれないな。」

皐久は改めて自分が危ない状況だったのだと思った。

「ちなみに、えっと、綴さんがやっていた任務というのは？」



稜久が小さい声で聞いた。

「んー。子供の人身売買を調査していた。」

「えっ!？」

子供が子供の人身売買の調査をする。異様な光景が目には浮かんた。

「でもそれと今回の件は関係がないのではないのでしょうか？」

二夜は首を傾げた。

「その人身売買をしているグループのリーダー、水波彌太郎（たろう）は楓桔君のお父さんだったんだ。だから万が一あのまま連れていかれたらアフリカの方までさようならしていたかも。」

「冗談でもそんなこと言わないで下さい。」

綴はあははと笑った。

「まあ、無事だったから良いか。…さて、それはいいとして稜久君、ここにサインをお願いできるかな。任務完遂を証明する為に依頼人からサインをもらわないといけないんだ。」

「あっ、は、はいっ。」

そう言って、綴と琥珀、稜久は部屋を出て行った。

「じゃあ、これで玖力君ともお別れだね。」

三人が出ていくのを見ながら、二夜は淡々と言った。そのことばに阜久は動揺を隠せなかった。

「え…何で…。」

「何で…ね。私がここへ来たのは任務の為。その任務も終わったんだからいなくなって当然でしょ？」

「でも…。」

「そういう決まりだから。」

二夜は口を噤んだ。阜久は二夜に詰めよった。

「月代さんは此処が嫌い？」

二夜は一瞬目を見開いて、少し考えてから笑って言った。

「大っ嫌い。」

## 六

二夜がいなくなってから五ヶ月が経ち、今日は卒業式だ。

二夜がいた約二ヶ月間の出来事はもう皆の記憶の中から消えかかっていた。

臯久でさえ今までにない充実した生活の中、二夜の事を思い出すことは少なくなっていた。

優しい家族、友達、先生に囲まれ、臯久は本当に幸せだった。

卒業式も滞り無く終わり家に帰ると、ポストに便箋が二つ入っていた。臯久は便箋を開けた。

『玖力臯久様

お久しぶりです。そちらの生活は良いものになっていますか。何事もなく毎日を送っていたらとても嬉しいです。

こうして手紙を書いたのは、紫雨から玖力君が私のことを知りたいと思っていたということを知ったからです。

紫雨が私の事を話さず知らないと言ったのは私の口から伝えてほしかったからでしょう。

私は昔、玖力君に会った事があります。というより玖力君と同じクラスでした。



神吉夜かみよしよるというのが私の本名です。

私は小学一年生の時、学校というものを学ぶためここにきていました。

私は玖力君の虐めを止められなかった。自分のことではいっばいだった。虐めの現場に行くわしたときでさえ私は見て見ぬふりをした。

だから私はその場所が嫌いです。力のなかった私が逃げて来た場所だから。

体には気を付けて、元気に過ごしてください。

月代二夜』

臯久はその場で崩れ落ち嗚咽を漏らした。胸が苦しかった。

涙をこらえながら臯久はもう一枚の便箋を開けた。手紙と住所と時間の書かれたメモが入っていた。

臯久は頭の中が真っ白になった。

二夜に、確かめたいことが沢山あった。でもなんの勇氣もなかった。

初めから何の覚悟もなかった。

夜の見たもの

一

二夜は廃病院にいた。建物は六階建て。白く塗られた外壁は蔦で覆われていた。

ここはストリートチルドレンの犯罪集団が拠点にしているらしい。

今回の任務は「粛清」をすること。

「大丈夫かい？」

ずっと無言だった二夜に綴は声をかけた。

「…あ、はい。」

「今回が初めてなんだろう？ 無理はしていないかい？」

「はい。」

二夜の目は淀んでいた。

「綴さん。」

「何だい？」

「綴さんは人を殺すことにためらいはないんですか？」

それを聞いて綴は笑った。

「夜は怖いかい？ 人を殺すことが。」

「……………」

「なら、無関係な一般人が来るのを願うしかないね。」

「……………」

二人が階段を上っていく間無言の時間が続いた。

「誰だお前！」

六階まで登り切ると、痩せ細った子供が十二人程いた。

殆どがまだ十歳以下だった。



子供たちは武器を持ち、こちらを睨みつけていた。

「国の者です。窃盗などを行い国民に被害を及ぼしたとしてあなた方を肅清しに來ました。ご協力をお願いします。」

綴は淡々と言った。

「夜。無理ならやるけど。」

二夜は答えられなかった。次の瞬間、発砲音と共に叫び声が聞こえた。

弾は床に放たれたが、それはわざと綴が床に撃ったのだ。綴はもう一度銃を構えた。

二夜も銃を構えた。先には女の子がいた。

「死にたくない。」

発砲音が鳴り響いた。

## 二

「お姉ちゃん。」

私はストリートチルドレンだった。親に虐待され五歳の時、姉弟で逃げてきた。

「今日は久しぶりにパンがとれたって、早く行こう！」

私は弟と仲間たちと一緒に閉校した小学校で生活していた。

「いただきます。」

生活は苦しかったが毎日楽しかった。

「今日は何の仕事してたの？」

生活の為なら何でもした。

「今日は金融会社のハッキング。結構稼げたよ。」

犯罪にも手を染めた。

「これで美味しいもの買ってあげるね。」

殺された。

「神吉夜はお前だな。」

皆、殺された。

「君、言葉は分かるかい？」

血に濡れた女の子が聞いてきた。

「お姉ちゃ——」

私が最後まで抱きしめていた弟も、その女の子に殺された。

「君には才能がある。」

そう言って私を連れて行った。

「綴君、その——」

そう言っていたのを聞いた。

銃弾は綴の肩を貫通していた。突然の仲間割れに全員が固まった。

「私は貴方がかわいそうです。」

鼻で笑いながら二夜は言った。

綴は痛みに顔を歪めていた。





「国に機械のように作られた『完璧な子供』である貴方が。」  
「……。」

「こんな政策、私が潰してやります。子供をモノとして扱っていいわけない。」

「夜は子供たちがモノとして扱われていると言いたいんだね。」

「そうさっきから言っています。もはや人権なんて存在していない。私の弟だって、簡単に貴方に殺された。」  
「…そうか。でもね。」

綴が放った銃弾は二夜の脳天を射抜いた。

「親に捨てられた私たちにそんなことを言う資格はないんだよ。」

綴が指示をするとストリートチルドレンの役をしていた子供たちが二夜の死体を運んで行った。

一人になった綴は壁に寄り掛かり、肩を押さえながら喘いだ。

「確かに人権はないみたいだね。」

「お姉ちゃん……。」

急いできたのか琥珀が肩で息をしながら心配そうに綴を見ていた。綴は優しく琥珀を抱きしめると、顔を埋めて嗚咽を漏らした。

「夜……助けられなかった……。」

綴は言われるがままに何度も人を殺してきた。そして綴も弟を守るためだった。

「二夜には力がなかった。それだけだよ。」

琥珀が言った。

臯久に届いた、もう一つの手紙は綴からだった。

『玖力臯久様へ

貴方が、見えなかったものを見る覚悟が本当にあるなら、二夜を助けてください。

綴より』

臯久は来なかった。

その日、臯久は友達いつものように楽しい学校生活を送っていた。